



Title	武者絵本の変貌と連続性：近世大衆文化にみられる現象
Author(s)	San Emeterio Cabanes, Gonzalo
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/53893
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (San Emeterio Cabanes・Gonzalo)

論文題名 武者絵本の変貌と連続性 ―近世大衆文化にみられる現象―

論文内容の要旨

武者の姿やその戦いの様子を、本文と見開きの画面を使って描き出した武者絵本は、江戸時代前期に現れ、明治中期に至るまで出版され続けた。このサブ・ジャンルは現在の研究では、主に子供向けのものとして考えられることが多いが、事実はそれより複雑で、武士に対する社会的な憧れを反映する文化的な産物であり、しかも時代を経て書誌的・内容的にも変わってゆく出版物である。

第1章では、江戸時代から明治初期に刊行された武者絵本の195点の調査を通じて、書誌的な立場からみると五つの時期に分ける。

1) 貞享頃(1680)から享保の始まり(1719)に至るまで。

この時期の武者絵本は、主に大本仕立て(凡そ二十七x十八センチの間)で、表紙に一貫性がなかった時期である。

2) 享保頃(1719)から明和頃(1772)まで。

十八世紀に入ると、半紙本仕立て(凡そ二十二x十五センチの間)が徐々に多くなり、行成表紙が主な表紙の仕立てとなる。

3) 明和頃(1772)から天保頃(1830)まで。

上方の本屋が徐々に勢いを失い、江戸の本屋が活発になる十八世紀後半になると、半紙本仕立ては徐々に消えてゆき、江戸の代表的な出版物である合巻の影響で、より小さい仕立てである、摺付表紙の中本(凡そ十八x十二センチ)が主流となる。

4) 天保(1830)から明治初期まで。

江戸末期に現れた切附本で、合巻より数丁のおおい仕立てで刊行される。

5) 幕末～明治中期頃まで。

この時期になると、小本仕立て(凡そ十五x十一センチ)と豆本(小本の半分くらい)仕立てが多くなり、明治に入ると、銅版本が流行ってくる。そして、十九世紀の八十年代に入ると、武者絵本は急速に勢いを失い、消えてゆく。

従って、武者絵本は、その登場から消滅に向かって、サイズが徐々に小さくなる傾向が指摘できる。

一方、内容について、序文の分析からは、娯楽的な目的で刊行された武者絵本もあれば、絵手本として考えられた武者絵本もあったことが分かる。また、子供向けの場合、最初は教育的な目的で刊行されたものが多く、第二期に入ってから、特に半紙本仕立ての行成表紙を持つ作品で、娯楽的な目的や読み物初めとしての武者絵本が中心となり、明治時代に至るまで、そのような目的が殆ど変わることなく続く。

また、武者絵本の目的とともに、画題の変容も行われた。本稿では、武者絵本の始発である第1期(貞享頃～享保の始まりまで)と享保頃(1719)から明和頃(1772)までの、上方出版の黄金時代に限って考察した。武者絵本の画題は最近の研究では、主に寺社に奉納された武者絵馬と密接な関係があると考えられるようになった。しかし、これは全ての例に当てはまる訳ではない。興味深い例外は菱川師宣の武者絵本である。菱川師宣は、江戸前期の最も代表的な絵師であり、絵本の発明者とも呼ばれるほどの人気者である。そして、第2章では、師宣の作品の中で、武者絵本の最古の例の中の三点である『大和武者絵』(1680、大本)、『武者さくら』(1684、大本)、『古今武士道絵尽』(1685、大本)を取り上げた。その作品には、画面とともに長い本文が記されているため、美術的な分析だけではなく、文学的な分析もできる。調査の結果からみると、『武者さくら』の場合、その時に流行っていた、仮名草子の改題本からの影響が確認できる。さらに、内容はかなり忠実に仮名草子から書き写され、画面が仮名草子の挿絵をモデルにしたものが多い。また、『大和武者絵』と『古今武士道絵尽』の場合、『平家物語』と浄瑠璃の影響が見られ、内容的なレベルで『武者さくら』からは離れた絵本である。こうした事例から、この頃には武者絵馬を拠所にする武者絵本だけでなく、仮名草子、軍記物語と浄瑠璃からの影響もあったことが指摘できる。それに加え、当時の本屋の出版ポリシーもうかがうことができる。現在は、出版社が出版する本に影響を与えることであることは当然であるが、

出版界の資料が僅かである十七世紀にはこのような出版界の態度があったかどうかは、それほど明らかではない。しかし、師宣の武者絵本の場合、『武者さくら』が仮名草子の出版で人気を得た松会から出版され、『大和武者絵』と『古今武士道絵尽』が浄瑠璃関係の出版物を刊行する鱗形屋から出版されたことは、本屋の間には出版ポリシーがあった証拠にもなると考えられる。

序文から判断すると、師宣の武者絵本の主な目的は絵を学ぶこと（つまり絵手本として利用されること）であり、目的によって書誌的・画題的な特徴が変化するかどうかまでは確認できない。他の出版目的、あるいは読者対象について考察するため、第3章では上方で出版された作品を取り上げた。その時期に刊行された、上方武者絵本の様々な例の中に、『本朝百人武将伝』（1710以前、大本）と『絵本故事談』（1714、半紙本）がある。この二つの武者絵本の特徴は、序文には、その頃に流行っていた勸善懲悪という教育方法論の思想が含まれている点あり、そこから、教育的な目的で刊行されたことが明らかとなる。また、本文も長く、どのような典拠が利用されたかを確認することができる。『本朝百人武将伝』は時代順で、記紀に登場する道臣命から豊臣秀吉に至るまでの有名な武将の肖像と人生を紹介する作品である。林羅山の作とされる『本朝百将伝』（1656）を美術的なモデルとして、本文は林羅山の三男である林鷺峰の『本朝百将伝抄』（1667）から取材されたものである。他方、『絵本故事談』の場合、画面が様々な典拠から取られているが、本文の主な典拠は、教訓書として考えられていた『日本古今人物史』に取材されている例が多い。これは、十八世紀の始まりの、教育的な目的として考えられた武者絵本の特徴である。典拠は、軍記物語や浄瑠璃ではなく、主に教訓的な資料である。

序文から絵手本として刊行されたことが分かる武者絵本として、『絵本写宝袋』（1720、半紙本）と『絵本勇武誉草』（1711～16の間、大本）がある。『絵本写宝袋』の場合、本文も長く、シーンによって典拠が確認できる例もある。特に著しいのは、通俗史書である『前太平記』と『多田五代記』からの美術的内容的な影響である。通俗史書からの人物が登場することは、師宣の武者絵本にも、教育的な武者絵本にも見られなかった、十八世紀の始まりとともに現れた現象である。また、『絵本勇武誉草』の場合、本文が非常に少なく、シーンの典拠を明らかにすることは困難である例もあるが、『前太平記』、『北条五代記』等に取材されたと思われる人物に加え、古浄瑠璃と伝承文学から取られた人物もある。

従って、この時期には、出版界に二つの傾向が確認できる。一つは、教育的な目的として考えられた武者絵本であり、その特徴は、当時の教訓書を典拠にすることである。もう一つは、絵手本的な武者絵本であり、浄瑠璃と軍記物語の影響に加え、当時流行っていた通俗軍書からの影響が強いと指摘できる。

第2期に入ると、上方の出版界には、子供向けの娯楽的な武者絵本が登場し、内容的な変化が著しくなる。特に指摘できるのは、女武者と若い武者の登場である。第4ではこの二点に焦点をあわせた。女武者は最古の武者絵本にも見られるが、第一期には、神功皇后・巴御前・静御前という有名なトリオが中心であり、各絵本に一回、二回しか見られなかった。しかし、第二期になると、教育的な目的で刊行された仮名草子である『本朝女鑑』と『本朝列女伝』、及び大力女が登場する浄瑠璃・歌舞伎「鬼一法眼三略巻」（1731初演）や「和田合戦女舞鶴」（1736初演）等の影響で、武者絵本に登場する女武者は増えてくる。それだけでなく、女武者を中心にした、教育的な目的としての『絵本女武勇粧競』（1757）と、恐らく娯楽的な目的としての半紙本仕立ての『八千歳鱈一眠』と「女武者」（両方とも出版年未詳）という仮題で知られる武者絵本も刊行され、後の武者絵本にも影響を及ぼした。他方、若い頃の武者というテーマも、新しく現れる。若い頃の武者を中心にした武者絵本は只一点が現存しており、教育的な目的として刊行された、大本仕立ての『絵本高名二葉草』（1759）であるが、この時期から他の武者絵本にも少しずつ現れてくる画題である。この若い頃の武者の話の中には、通俗軍書の『前太平記』、『陰徳太平記』や『甲陽軍鑑』に取材された人物もみられ、この時期には、武者絵本の典拠が次第に豊かになっていることが確認できる。さらに、前期に絵手本の武者絵本に限られていた通俗史書の武者は、別の目的として刊行された武者絵本にも入るようになることが分かる。

一方、新しい典拠と武者だけではなく、子供の遊びとして考えられた、西川祐信による『絵本武者考鑑』（1750）に見られるように、武者話の代表的な典拠である軍記物語を中心にした武者絵本も引き続き刊行されていることが分かる。しかし、前に見られた武者も、新しい焦点で扱われることができる。例えば、羅生門の鬼を退治する渡辺綱は、あらゆる武者絵本に見られるシーンであるが、同書では、このシーンから離れて、羅生門へ行く前の渡辺綱が源頼光と一緒にいる場面が中心となっている。当時の絵師の間に行われた、武者の新しい画題探求の例だと考えてもよいであろう。

武者絵本は、江戸時代の出版界の豊かさを表す現象の一つであり、社会の変化とともに様々な型式・内容をもって現れてくる。本研究では、画題的なレベルで、十八世紀の半ばまでに限ったが、武者絵本の多彩な様相と内容は十分にうかがうことができるであろう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (サン エメテリオ カバニエス ゴンサロ)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	准教授 柴田 芳成
	副 査	教授 加藤 均
	副 査	准教授 蔦 清行
	副 査	教授 嶋本 隆光
	副 査	准教授 (大阪市立大学大学院文学研究科) 久堀 裕朗

論文審査の結果の要旨

提出された論文「武者絵本の変貌と連続性—近世大衆文化にみられる現象—」は、江戸時代に出版された草子のうち、武者絵本（武者のエピソードを絵入りで紹介する絵本）と称される作品群を取り上げ、形式面における時代による変遷と特徴、内容面における出典との関係、それぞれの本の性格、対象読者像などを整理・分析し、江戸時代という社会の中で絵本が担っていた文化的な意義を考察したものである。研究対象とされる武者絵本は、大衆向け草子であり、国文学では主たる研究対象とはなりにくく、児童文学からもわずかに言及がある程度で、十分な先行研究の蓄積があるとはいいがたいものであったが、そうした従来の分野区分を横断する形で文化史として捉え直した研究といえる。

第1章では、先行研究をまとめた上で、稿者の調査した195点の資料を「書型・表紙・丁数・冊数」といった本の外形に注目することで、1)江戸初期～享保・元文期 2)享保～明和期 3)明和～天保期 4)天保～幕末・明治初期 の四つの時期に区分できることを示し、それぞれの特徴を明らかにしている。

第2章は菱川師宣の作成した武者絵本を扱う。美術史の分野から武者絵本の淵源は絵馬の図様にあるとの説が提出されていたが、稿者は師宣作『武者さくら』を取り上げ、その本文・挿絵が当時すでに刊行されていた仮名草子（『武家巧者咄』『古今軍鑑』『武家軍談』『日本名女物語』）に基づくものであることを証明した。また、同じ師宣の『大和武者絵』『古今武士道絵尽』についても出典が軍記や浄瑠璃作品に求められることを示すことができた。さらに、これらの作品に出版元の別が見られることについても、取り上げられた武者の話と、出版元が得意としていた出版物との関係が作用しているとの結論を得られている。

第3章では、江戸時代前期の絵本から、『本朝百人武将伝』『絵本故事談』『絵本写宝袋』『絵本勇武誉草』を対象に、絵本の出版目的を考察する。序文、および本文内容・典拠の確認から、前の二作品は教育的な意味合いが強く、後の二作品には絵手本としての傾向が見られることを示し、それぞれの特徴を述べる。

第4章では、江戸時代中期の傾向を探る。女武者が題材とされる作品の検討として、まず、女武者が題材となる場合には「誰の・どの場面」が描かれるのかを様々な武者絵本から検索し、その代表的な例を一覧にまとめている。その上で、江戸中期の女武者絵本『絵本女武勇粧競』の典拠を確認し、後代作品への影響についても言及する。また、著名な武者の少年時代や若者武士を描く『絵本高名二葉草』を取り上げて、そこに、この時期に現れてくる新たな傾向として、教育的な目的が薄れ、娯楽的な色彩の強まりがみられることを指摘する。

以上の通り、本論文では、これまで研究の中心に据えられることのほとんどなかった武者絵本という対象に取り組んでいる。第1章に示された絵本群全体の展開・変遷を考察したのも稿者の試案が初めてのものであり、今後修正される点があるとしても、十分に意義のあるものと認められる。各章で試みられている典拠の確認も丁寧になされ、個々の作品についての成立背景がうかがわれるものである。稿者自身が認めるように、本論文は江戸の中期以前の上層出版物を中心としており、江戸中期以降、読本・合巻や歌舞伎との影響が考えられる江戸の出版物の考察は今後の課題に残されているものの、論文審査委員会は本論文が意欲的で学術的な価値を有しており、博士の学位に値すると判断した。